

鉤 鑿

1.



夜でも昼でも
牢屋はくらい
いつでも鬼めが
ああ
窓からのぞく

どん底

9月例会 / 東京芸術座 / どん底 / 9月13日(月) PM 6.00
於・旭川市公会堂

旭川勤労者演劇協議会(準備会)

東京芸術座
第29回公演

どん底

4 幕

作 者
ゴリーキイ
訳 者
小山内 薫
演 出
村山 知 義

装 置
松下 朗
照 明
篠木 佐夫
効 果
深川 定次
文芸助手
関口 潤
演出助手
山 岸 秀太郎
舞台監督
長 尾 忠 克
岸 野 昭 嗣
制 作
釘 崎 康 治

にーいんーげん
人ー間 ステキなものだ
人間は尊敬すべきものだ

■キャスト■
コストイリョーフ
ヴァンリリーサ
ナトーシヤ

代志住 正
崎田 和子
市来 まさみ
荒木 かずほ

メドヴェーニョフ
ペーベル
クレーシチ
アンナ
ナースチャ
クヴァシニヤ
ブブノーフ
サーチン
役者
男爵
ルカー
アリョーシカ
めっかちゾーフ
だったん人
浮浪人たち

白石 守
三由 茂
西島 倂四郎
左右田 一平
関 京子
浅田 和子
清洲 すみ子
芝田 陽子
西川 ひろみ
保科 三良
石田 知充
加賀谷 純一
北村 耕太郎
立川 恵三
今橋 恒
小比類卷 孝一
川 副 敏
林 邦 明
倉田 地三
吉原 興一
佐治 央都
下山 久
徳武 忠吉
笹岡 延行
島 隆 士
平井 高 雄
岸谷 善 子
岡田 恵子

あ

らす

じ

ほらあなのような地下室の木賃宿。盗品故売にも手を出している木賃宿の亭主夫婦は、このほらあなをあぶれ者たちに貸し、彼らから徹底的にしぼりあげる。

ここに住みついているのは、泥棒の常習犯ワシカ・ペーベル。いつかはこのほらあなから抜けだそうと働きづめに働く錠前屋のクレーシチと死にかけている女房のアンナ。夜の女になりながらも、胸にひめた情熱のもえさしにロマンティックな空想にふけるナースチャ。おちぶれた貴族のなれのはてだという男爵と呼ばれる男。アルコール中毒の元役者。電信技師だったというイカサマ賭博師のサーチン。手風琴をもつんだくれの若者、靴屋のアリョーシカ。なまけものの帽子屋ブブノーフ。一度経験した結婚生活にこりて肉まんじゅうを売って歩きながら独身生活を送るクヴァシニヤ。土方人足のゾーフにダッタン人。世間からしめだされた敗残者のむれだ。

泥棒のワシカ・ペーベルは彼の関係して来た木賃宿の亭主の女房ヴァンリリーサにいや気がさし、この生活にもあきている。彼の新しい恋人ナトーシヤはヴァンリリーサの妹だが、姉とちがつて純潔な少女だ。亭主のコストイリョーフは、ペーベル

「どん底」について

「どん底」の書かれた一九〇二年は、一九〇四年はじまつた日露戦争、一九〇五年の「血の日曜日」「戦艦ポチョムキン」の反乱」とつづく革命期の前後にあたり皇帝ニコライ二世の専制政治が極度に反動化した時代であった。幼い頃からどん底生活の苦しみを味わったゴリキイは

ゴリキイの文学の特徴は、「この世界でもっともすばらしい最高の創造物」は人間であるという彼の確たる思想にあるといえよう。「どん底」は、そういうゴリキイ文学の、もっとも代表的な作品のひとつだといえるだろう。

「どん底」の世界は暗い。「夜でも昼でも、牢屋は暗い。」という歌のように暗く、どこにも出口がないようにみえるそこには泥棒やイカサマ師や売春婦や、アル中の役者や、れい落した男爵など、世のさまざまな敗者たちがひしめいている。そして彼らは生きることに絶望しながらしかしそれぞれ個性的に生きていく。

ゴリキイはそのような人間群像を生身のまま提示することで、彼らに對

八十年代にナロードニキ運動に身を投じ、一八九二年処女作「マカールチュードラ」を発表し文学活動の第一歩を踏みだした。

「どん底」は彼の三五才の時に書かれた。一五〇二年「小市民」のモスクワ芸術座上演に続いて、同年十二月、モスクワ芸術座ダンチェンコによって「どん底」は初演の幕をあげた。

日本ではそれから八年たった明治四十三年、小山内薫の訳、演出で自由劇場第三回公演として上演されて以来、日本新劇の創生期から現在まで、新劇の歴史と共に上演されて来た貴重な財

する限らない愛情と、人間というものの不可侵の尊厳とを表現している。人間に対する不信や猜疑や憎悪ではなく信頼と連帯を保証する民主的な精神の光源のようなものがそこには示されている。

「どん底」は作者の主観によって現実を裁断するのでなく、現実そのもの

人間の劇「どん底」

霜 多 正 次

をその複雑さにおいて強烈に提示し、読者の自由な想像力をかきたてるような作品である。だから、おそらく「どん底」ほど、世界各国でしばしば上演された戯曲は数少いであろう。

日本では「新劇十八番中の十八番」といわれるその「どん底」が、いま東

産になっています。

昭和十一年（一九三六年）村山知義の新協劇団で演出第六番目として上演され、それまでの演出にあつたルンペン生活の讚美、「どん底」にうごめく人々を憐れな犠牲者として表現する演出は否定され、どん底の人々の生活と性格の中に発展的なものと否定的なものとの明確な位置づけを行くことが強調され、村山演出に変わって「どん底」は第二の誕生をむかえたと言われ、現在につながるリアリズム劇確立の記念的作品の一つになった。

京芸術座で「どん底」演出家の第一人者である村山知義氏の演出で、上演されている。

氏の「どん底」演出はこんどが七回目だといわれ、いよいよ円熟の度を加えている。その意欲的な演出と、それにこたえる俳優たちの熱気とに支えられて、こんどの「どん底」は私がこれまで見た三度の「どん底」のうちでもっとも感動的であつた。

そこでは、たとえばルカを救済主にしたてるとか、サーチンを未来の坦い手に想定するとかという一面的な解釈でなく、登場人物全体のおりなす人間劇の生々しさを、じかにぶつけられる思いがしたからである。

（東芸機関誌から）

とヴァンリーサの仲を気づいていらし、ヴァンリーサはヴァンリーサで、ペーベルとナターシャの仲をさこうとする。

しかし、ペーベルが自分の思い通りにならないと感じたヴァンリーサは、大金を餌にして亭主を殺し、ナターシャを連れてどこへでも逃げるとペーベルをそそのかす。

妹のナターシャが一人の老人を連れてくる。巡礼のルカーである。ルカーは奇妙な老人で、ペーベルや男爵、役者など、みんなと話を合せられるし、病人のアンナの面倒も親切に見てやる。

「夜でも昼でも、牢屋は暗い、いつでも鬼めが窓からのぞく」ブブノーフやゾーブなどが大声で唄う中でみんなはイカサマとばくに熱中する。アンナはあの世には安息があるだけだとルカーから聞いて安心して息をひきとる。そしてルカーはアル中の役者には、酒のみのために無料で治療してくれる病院があると希望をもたせる。

ナターシャとここから出る決心をしたペーベルは、ナターシャをかばい、はずみで宿の亭主コスティリヨーフを殺してしまふ。ルカーはその騒動の中で、みんなに大きな波紋を残したまま消えてしまふ。そしてある風のはえる夜、役者は首をくぐる。社会への反抗と新しい生活への模索、どん底の生活は、一体いつまでつづくことだろうか。

旭川労演(準備会)によせて

——一人の会員が
もう一人の新しい会員と——

谷口 広志
△旭川文協・事務局長▽

終戦後の二年目に旭川勤労文化協会が新協劇団を招き、公演を開催した。おそらく戦前・戦後をとおして民主団体が、新劇を招いたのは初めてであろう。戦時中はすぐれた芸術文化はもろろん、自由主義的な会合すら禁止されていたのだ。そうした軍国主義日本から解放された終戦後の民主主義的自由の息吹きは、怒涛のごとくおしよせた。文化運動も急速にたかまつたが、われわれもいち早く音楽会や雑誌の発行、自立演劇活動などにエネルギーをかけたことは、いうまでもない。そのひとつに新協劇団の「破戒」公演に取組んだわけだ。いろいろと悪条件はあったが、われわれは熱情を傾けて観客動員に奔走した。そして当時の国劇を満員にし、ひさ方ぶりに「破戒」の舞台上

感動したものである。だが結果的には赤字をだし本間誠一氏に虫のいいことをいって小屋代を負けてもらい、どうやら事なきをえた。いま考えてみると無謀のひと言につきるが、新劇にかけたひたむきな情熱は、いま思い出しても悔いがない。

さて、このたび旭川労演準備会は東京芸術座を迎えて「どん底」公演をするという。新劇の古典であるゴリキの「どん底」であり、「どん底」の演出では定評のある村山知義なので見ごたえはあるし、その期待は十分叶えてくれるだろう。旭川でも、ことしに入つてから劇団四季さつぼろほかの劇団が来演しており、居ながらにして優れた新劇の醍醐味を觀賞するめぐまれた時機に至つたともいえる。われわれにとつて、このうえないよろこびである。そこで老婆心ながら労演準備会に対して、注文と感想をすこし述べておきたい。まず労演は会員組織によるすぐれた演劇觀賞サークルである、という自明のことに徹することだ。例会を開くことによつて座談会や機関紙発行は当然のことながら、それ以外のことに

あまり手を出さぬこと。つぎに、会員組織といつても会員を流動的に受止めることだ。すなわち例会内容によつて会員増減の振幅がはげしいことを、まもつて計算にいれておくことだともいう。例えば労音の例会で岸洋子シャノンで一千三百名動員できたのが、次の月のクラシック例会で四百名にダウンした例は、ままあるのである。最底の固定会員は何百名もきめてかかるのはいいが、例会内容で会員数は激変することを念頭においてやつてほしいとおもう。

したがつて労演の場合、何カ月に一回開催する例会の長期的レパトリーを早くに決め、対策を練つておくことがのぞましい。それから最後になつたが、いちばん大切なことは赤字を出さぬことだ。演劇はギャラ・旅費・宿泊費などがかさみ、公演相当な支出になる。そのため赤字を二、三回出すと致命的欠陥として危機に追い込まれる赤字は何かそのうちに解消できるといつた安易さで、会場費・印刷費・宿泊費を棚上げしてゆく傾向が出はじめたときに、労演の崩壊が寸前にあることを銘記してほしい。

ながい演劇運動を支えるものは、たんなる情熱ばかりでなく、ちみつな計画のうえに立つた健全な運営にしかないのである。

あえて苦言を呈するのにも、こんごの旭川労演の進展をこころからねがうひとりとして受止めてもらえれば幸いである。

「労演」とは……

。「労演」とは、演劇の好きな人達が毎月会費を積み立てて、秀れた演劇を旭川に迎えて観劇する演劇鑑賞のための市民組織です。

。「労演」は、無駄な経費を省き、運営を民主的なものにするために会の運営は全て会員の手で行ないます。

。そのため、三人以上のサークルが「労演」の基礎単位となつて、会費の納入、例会企画の決定などの仕事を行ないます。

。例会は二ヶ月に一回、つまり、年間六本の演劇を鑑賞します。

。「労演」は、合評会、機関紙の発行、その他文学、美術サークル等の活動を行ないます。

。例会入場の際は、受付で会員証を提示して入場します。

。二ヶ月以上、会費を滞納した場合、は会員の資格を自動的に失ないます。

入会金 一〇〇円
会費 五〇〇円(一ヶ月)

(なお、十一月例会「ガラスの動物園」は、十月、十一月分の会費で観劇します)

「毎例会に期待」

前田 和一郎

20代も後半にさしかかった今、毎日が単調さの繰り返しの中で、だんだん刺激に対する反応力が弱まっていく。暖かい日向の座布巾の上で背を丸めて猫のようなもので、何かの刺激に対しても、うつすらと目をあける程度の反応しかなさず、またもとの眼りに入るのである。

もう陳腐な刺激など欲しくはない、新鮮な生き／＼としたものが欲しいのである。今回の労演の例会、次回の、三回目の……きつと新鮮な何もかが、私を刺激して、またもとの若々しい自分が蘇ってくるのではないかと期待している。

「どん底」公演によせて

増子 美智子

人間は感情の動物であり、人に対する好悪の感情は中でも著しい面があると思います。数多い文芸作家の中でゴリーキーに対して私は「好」の感情が強い方です。なぜなら彼の文学の核心は人間の中にあるもっとも良いもの、美しいもの、正しいものを追求してい

るから……すべてのものは人間の内にあり、全てのものは人間のためであるとゴリーキーは「どん底」の中で人間尊重を訴えています。豊富な物質に囲まれないながらも物質を求め、また時には自欲のために人を踏みつける傾向を有している現代生活の中で、人間について考えてみることは有意義なことだと思います。

芝居

東出勝己

あわただしさの中の一ベル。
緊張の中の二ベル。
静かに溶暗していく場内——

(さあ、芝居が始まるぞ!!)

舞台が進むにつれ芝居の世界は地平線を伴って大きく、大きく広がってゆく。

(芝居の中に吸い込まれそうだが!)
廻りが暗いから涙が出ても平気。だけど芝居が終って、出て来る人の目が赤いやア。

涙を無理にかくそうと活発にふるま

う友。

興奮したほほに夜風が快い帰り道。

(芝居って、本当に最適だなあ。)

労演によせる期待

園辺 峰子

めまぐるしく変化していく社会状況の中でいわゆるマスコミを通じて、私達一人一人が好むと、好まざるとにかかわらず、体制側から「つくり上げられた」文化? (と呼んで正しいかどうかは疑問) が横行している今日、真の文化とは何かを問われているのは言うを待たないと思います。「つくり上げられた」ものから私達の手によって「つくり出していく」ために微力ですが、参加していきたいと思えます。



△地元劇団の活動▽

○劇団「河」

第四回子供劇場

児童劇「地球光りなさい」

脚色 倉本 聡

十月三十日 (予定)

(なお、学校公演も行います。)

○劇団「やまなみ」

旭川市秋の文化祭参加

△第十回公演「銀河鉄道の

恋人たち」二幕

作 大橋喜一

演出 菅野 浩

△移動小劇場「戦場のピク

ニック」

作 アラバール

いくつかの秀れた舞台が、北海道、あるいは旭川で上演されることなくUターンして行きました。そして私達はそれをそれ程不思議とも思わず、また旭川で公演を持つことが可能だとも思っています。私達のひそやかな願望が満たされる機会は、新聞社の企画か劇団の手打ち公演というたまさかの幸運以外にはなく、私達はじっとそれを待っていました。

しかし、もし、旭川に演劇愛好の仲間が六〇〇名を数えるならばそしてそれが会員としてキチンと組織されていたら、さらに、北海道のいくつかの都市にそのような組織が生れたら……その時、私達は演劇を観る機会を自己の手で保証するだけでなく、一歩すすんで、「何を観たいのか」という観客としての正当な権利を一部なりとも取り戻すことができるようになるのです。それは確かに、観客としての権利の完全な復権ではありません。しかし、ひたすら「待つ」ことから一歩足を踏み出すことの意味を私達はきわめて大きいと考えるのです。それは与えられる受動的な文化を拒否する第一歩であり、私達自身の文化創造への能動的な第一歩であると考えます。

今年の一月、私達は「旭川労演をつ

旭川労演準備会は何故生れたか

くる会」を発足させ、二月「若者たち」(青年劇場)、五月「奇跡の人」(東京演劇アンサンブルと)二つの舞台を持ち、「労演づくり」の活動をささやかながら続けて来ました。そして七月「旭川勤労者演劇協議会準備会」と名称を改めて本格的な労演づくりに取りかかったのです。

「労演とは何か」——それは私達にとつて明確であるとは云えません。しかし、全国にすでに生れている七十を越える労演の活動の中から、演劇鑑賞組織の最も本質的部分は「サークル」にあると私達は考えています。

旭川労演準備会運営委員会

「サークル」は、会費の納入・機関紙の配布といった日常の活動の基盤であることはもちろんですが、それにとどまらず、一つの演劇と一人の人間とのかわり合いを仲間の中で確め合い、一人一人の演劇への要求を集団の要求にまで高めてゆく場であつて欲しいのです。その結果として生れる多様な个性的なサークル活動こそ、サークルの協働体としての「労演」の生き／＼した活動を保証してゆくと考えています。

広く旭川市民の中に、労演サークルづくりをすすめてゆくにために、会員の皆様の御協力をお願いいたします。

ガラスの動物園

11月例会
文学座

出演

田辺信子
寺田路恵
江守徹
高橋悦史

崩れゆく家庭、
苛ら立つ青春
追憶のなかに綴る
愛と憎しみの劇、
ローソクの光に映
えるガラス細工の
きらめきにも似た
詩情溢れるウイリ
アムズの傑作



へんしゅうしつ

「労演をつくる会」から「労演準備会」へと大きく成長しました。だ

けど機関誌担当班はそのままスライド。わずかの成長をさがせばガリ刷

りから活版印刷になったことか。とに

にかく、活版に対しては素人ばかり。この皆んなの大切な労演の、

その会員一人一人のかけ橋になる機関誌が本当にその大役をはたしてい

るかはなほだ疑問です。しかし甘えてばかりはいられません。今後、より労演を

発展させて行く為に機関誌に対して御批判、御忠告をいただきたいと思

います。「銅鑼」第1号に原稿をお寄せ下さった方々本当にありがとうございます。

また「銅鑼」のデザインをして下さいました労演会員の遠藤博君、本

当にありがとうございます。

この誌面にてお礼申し上げます。

(M・K)